

2.2 Common reference levels of language proficiency

発表担当者：修士1年 郭 淑佳

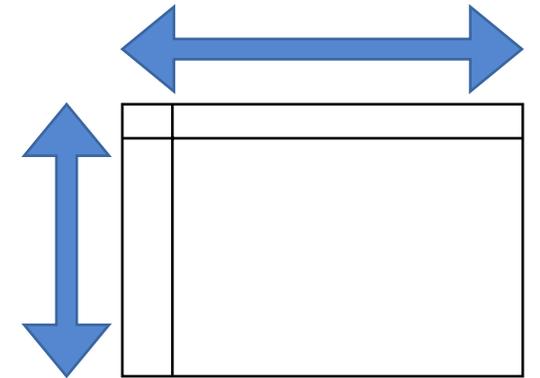
2.2 Common reference levels of language proficiency

- **vertical dimension** 「垂直次元」 (3章)
ascending series of common reference levels for
describing learner proficiency

学習者の言語能力の熟達度のレベル(A1～C2)

- **horizontal dimension** 「水平次元」 (4章、5章)
parameters of communicative activity and
communicative language competence

コミュニケーション活動とコミュニケーション言語能力の要素で構成



二次元の枠組みの有用性

- 熟達度の定義 → 各レベルで何が期待できるかを具体的に記述
… 学習目標を明確・現実的な形に
- 長期的な学習の進歩と連続性の保証 + シラバスと教材の関連付け
- 学習評価も容易に(シラバスを超えた学習、異なる状況での比較)
- 垂直 × 水平 → 部分的能力にも対応できる
- 学習環境が学習者のレベルに適しているかの判断も可能
- 共通の尺度 → 異なる機関・サービス間の協力も容易に

2.2 Common reference levels of language proficiency

注意点①

- 言語学習は持続的なものであり、かつ個人差もある、ということ

☹️ 熟達度のレベルを規定するというのは独断的なことかもしれない

→ しかし実用性を考慮すると、学習過程を明示するために
レベル別の尺度を定義づけることは有意義

- 熟達度のレベルや、その幅はシステムの目的によって決まる

→ 付録A: developing proficiency descriptors (尺度開発の基準)

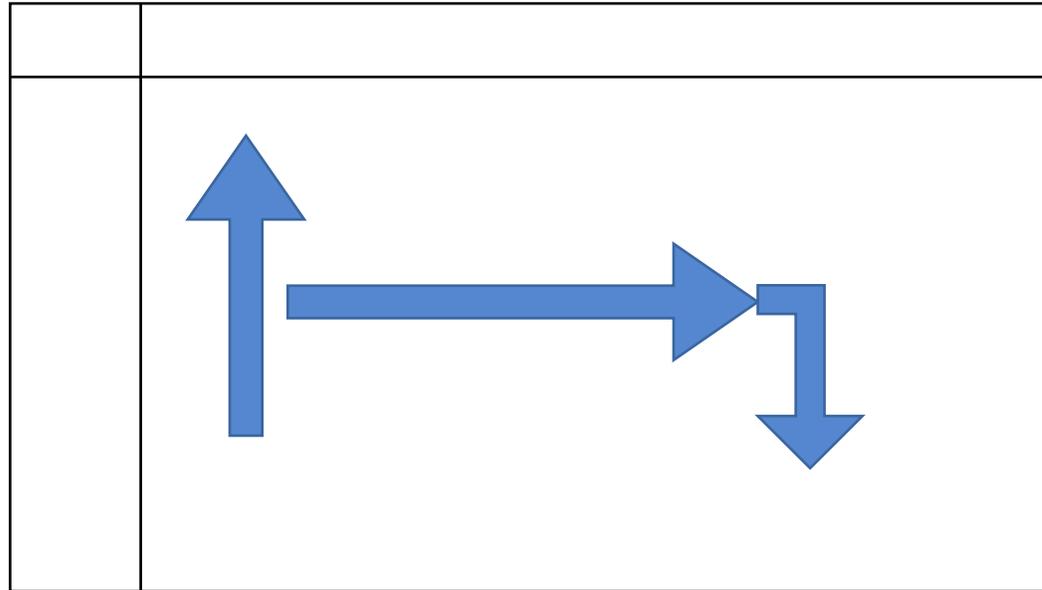
よいディスクリプタの条件や妥当性検証の方法について書かれている。

(テキストQ4, Q18, Q20などで詳しくカバー)

2.2 Common reference levels of language proficiency

注意点②

- 言語学習は垂直方向だけでなく、**水平方向の過程**としても考えられる
- 学習者の発達は必ずしも垂直方向とは限らない



2.2 Common reference levels of language proficiency

注意点③

- 言語熟達度の尺度とレベル…物差しのような直線的測定ではない

